

## 編集後記

前号に引き続き、今号でも編集を担当することになった。非力な編集長を支える編集委員会の方々、また事務局のスタッフに感謝申しあげたい。

前号から導入したレフリー制度であるが、まだまだ課題は多い。ただ、制度面においては、徐々に整いつつあると考えている。

今号においては、投稿申し込みは四十八本、掲載されたものはうち三十八本であった。また特別寄稿の論文が一本ある。

査読に関わった研究員は、編集委員会の三名（和田葉子、関肇、二階堂善弘）に加えて、内田慶市、乾善彦、中谷伸生、藤田高夫、陶徳民、吾妻重二、原田正俊、森部豊、蜷川順子、松浦章、長谷部剛、新谷英治の各研究員である。厳密に査読委員会のメンバーを決めているわけではないが、今号においてはこの十二名が査読委員という形になった。多忙ななかを査読に協力いただいた研究員には、重ねてお礼申しあげたい。

さて投稿本数、掲載論文の増加により、今号は前号と同じ形式では表紙に論文名を記載することができなかった。そのために今号はやや形式を変更している。この点についてはご諒解いただきたい。

また掲載本数が増加したために、物理的に製本が難しくなるのではないかとという事態も危惧されていた。予算などの制約から二分冊にするのは難しく、投稿本数が増えるのはありがたいことであるが、一方では予算を気にしながらの編集作業ともなった。この件では事務局スタッフに多大なるご迷惑をおかけした。

前号の後記にも記したが、やはりいずれは電子化、ネット化への対応が不可避であると考えられる。実際には、学術雑誌というのは、ネット化への親和性が高い。研究者が必要とするのは論文の一本、或い

は数本であり、そのために雑誌全体を所有するのはかなり手間である  
と考える。もし論文がインターネット上に公開されているのであれば、  
研究者は必要な時に必要なだけ論文を参照できる。会費で運用され  
ている学会誌では全面公開は難しいかもしれないが、大学の紀要類や研  
究所の雑誌は、むしろ世界中からアクセスが可能なネットでの公開が  
望ましいと考える。学術誌として質を高めるための編集や査読の作業  
は必要になるが、印刷費については削減が可能となるのではないだろ  
うか。印刷物、或いは抜き刷りが必要な場合はオンデマンドにより、  
個別の研究費で対応すればよい。多くの学術雑誌が、そういった情報  
化を必要とする時代に来ているのではないだろうか。（二階堂善弘）

平成二十八年四月一日発行

発行 © 関西大学東西学術研究所

所長 中谷伸生

〒五六四一八六八〇

大阪府吹田市山手町三丁目三番三三二五号

電話〇六一六三六八一〇六五三番

FAX〇六一六三三九一七七二番

編集者 関西大学東西学術研究所

編集委員長 二階堂善弘

編集委員 関肇

和田葉子

印刷者 株式会社遊文舎